

初対面・ブートキャンプー英会話コンテストへの練習を通してー

総合政策学部1年 遠藤 忍

ID : 70701546 CNS : s07154se No : 17

1. はじめに

初対面の会話は難しい。会った事もない、素性も知らない間柄ならば当然だ。相手の姿に圧倒されたり、相手が怖い人だったらどうしようなどと不安になったりする。はたまた自分はどう思われているのかと気にする傾向もある。会話が始まっても、腹の探り合いになったり、薄っぺらくなったりしがちで、意思の疎通がうまく行かず、もどかしさを感じる。

不安やもどかしさを打破するために、気をつける事ならいくらでもある。それが分っていてもできないのが人間、だから難しい。しかし、苦手意識をもるともせず、初対面でも素晴らしいコミュニケーションを取り、の良好な関係を築いている人はたくさんいる。なぜだ。

ひと言にそれは経験だ。色んな場面や状況をくぐり抜け、不安やもどかしさの壁にぶち当たっては乗り越え、成長を繰り返していくこと。私たちにもそれが出来るのだろうか。いや、できる。それは、効率の良い方法で諦めずに経験を重ねていく事が重要だ。

私は、いかにして初対面のコミュニケーションを苦手と思わない、物怖じしない「自分」をつくるべきか、そのトレーニングメソッドやワザを、研究・実践（というと過言ではあるが）してみた。出身中学校で英会話の練習に励む後輩のもとで、授業・グループワーク・各種文献を大いに参考にしながら、練習メニューの研究実践フィールドワークに取り組んだ。この最終レポートでは、このフィールドワーク活動を核に、初対面のコミュニケーションにいつでも対応できるスキル習得の方法を考えたいと思う。

2. コミュニケーションスキルのための、インタラクティブ・フォーラム

研究題材とした英語インタラクティブ・フォーラムを説明しよう。ある特定のトピック（私の学校、私の好きなもの、夏と冬はどちらがよいか、など）について自由に英語で会話をする。1回の会話は4分もしくは5分間で、人数は3、4人である。審査では個人に対して点数を付与するが、その観点は個人の英語力だけではない。主に、会話に積極的に参加できているか、相手の話を聞いているか、話題の流れはスムーズか、会話の雰囲気は盛り上がっているか、などである。見方を変えれば、初対面ながらも「楽しい会話」を強要される。

後輩達の目標は勝つ事、そのために彼らは「英語を」上手に話そうとする。自分もかつて経験した時はそうだった。しかし、本来の目標は単なる英語力の向上だけではない。

近年、とくに子ども達は、自分を的確に表現する力、相手を受け入れて理解する力が足りていないように思える。その背景には、たとえば核家族化や塾の人気、テレビゲームの発達、携帯の登場などがある要に思える。斎藤孝氏は「著しく衰退しているのは身体次元のコミュニケーション」だと述べている。氏は、良いコミュニケーションは互いの身体が響き合っている時である、としている。しかし現代の人々は、お互い響き合うための「ふれあい」を忘れていてのではないか。本来、コミュニケーションするためにはお互いが他人と関わろうとする身体次元のオープンさが必要なのだ。

会話コミュニケーションは「メッセージ」と「価値観」（中西雅之）、あるいは「意味」と「感情」（斎藤孝）によって成り立つ。楽しい会話をしているときは、体が自然と温まってくる。それは、お互いが触れ合うことで感情を共有し、響き合っているからであろう。身体がオープンになっているということでもある。しかし、お互いが触れ合うコミュニケーションの機会が減ってきた事で、現代人の身体は冷めてしまい、響きにくい身体・閉ざされた身体になっている。その結果非言語要素の理解・共有の場をより削いでしまい、感情の共有がしづらい初対面の会話をさらに難しくしてしまっている。

だからこそ、響きやすい・温まった身体を体感するトレーニングが必要だ。氏は、そのトレーニングとして、英語を取り入れている。その理由を氏は「コミュニケーションできるオープンな身体を、英語を道具にして養う」としている。実際に、身体の動きを多く使いながらの英会話の授業をすると、「終わってみると、いかに自分の身体がいつも冷えたものであったかを痛感した、という感想が多かった」そうだ。

トレーニングとしての英語インタラクティブ・フォーラムは非常に有効であるはずだ。常に双方向の関係のなかで感情や価値観を共有し、身体を熱く・オープンにする事ができる。使い慣れた言語ではない英語でコミュニケーションするからこそ得られる新たな発見もあるだろう。身に付くのは英語

の力だけではなく、日本語やそれ以外の外国語を使用する際の基盤となるコミュニケーションに適した身体・態度・スキルなのである。このコンテストの目的、そして効果の可能性はこうした非言語要素・基盤の習得にある。

3. 初対面のもどかしさを打破する5ステップ

初対面の人との会話はときになかなかうまく進まない事がある。ぎこちなさやもどかしさがあり、話が噛み合なかつたりする。その原因はいくつか考えられる。

そもそも相手の事をなにも知らない事が大きい。相手がどんな人間かを理解できない間は、どうしたって価値観を共有する事はできない。会話はそれなりに出来ても、誤解やぎこちなさが残る。また、相手の第一印象から勝手に相手を選ぶ、または自分の印象を気にして会話をしようとしなないなど、「印象」が邪魔をする。コミュニケーションを拒否してしまうか、自分を取り繕ったり、腹の探り合い状態になったりする。

そして、先ほどの2つの原因とも重なるが、話が深まらずに薄っぺらくなってしまいう事も挙げられる。お互いに会話が一方通行になり相互作用がほとんど見られなくなる。ユーモアも単発では後がしられてしまうなど、流れがなく、沈黙も気まずくなる。

インタラクティブ・フォーラムでは、例え相手が初対面の人でも、積極的かつ協調して楽しく喋ることが「強要」される。とりあえずいっぱい喋ろうとするが、それでも一方的に話してしまったり、会話に入り込めなかつたり、話のネタが尽きたり、沈黙を打開できなかつたりなど、ぎこちなさ・もどかしさ・悔しさを経験する。

練習の内容を考えメニューを研究していくに当たって、まず初対面のぎこちなさ・もどかしさの原因、もっと大きく言えば初対面での不安感を乗り越え、防止する必要があった。そうすると、いくつかの目標が見えてきた。

1. 自己紹介が出来る
2. 自分の事が言える
3. 相手に反応できる
4. 相手に質問できる
5. 気持ちよく終わる

以上5つのステップを到達目標と位置づけた。もちろんこれは段階を追う形で考えた目標である。前段階で身に付けたスキルは次の段階で必ず生きるような段階を考えており、つまり実際のトレーニング・ワザを考える上でも必ず段階を踏み、身につけたスキルがその先につながるようになる。今回の到達目標は特にインタラクティブ・フォーラムにおいてそれらを達成するために編み出したが、この到達目標は決して特殊化されたものではなく、一般的にも通じると考える。

それでは、私が研究実践した練習を見ていこう。

4. インパクト自己紹介

中西雅之氏は著書で、会話コミュニケーションにおける不透明性、つまり相手の事を知らない不透明性について述べている。名前も出身も興味も分らない状態では不安がつきものだ。そうした不安や不透明性を取り除くすべの一つが自己紹介である。相手に最低限の自分についての情報を与え、話を広げるきっかけを作ることができる。それ以上に、「あなたと話したい」「あなたと話す用意がある」という事を伝え、相手と自分に安心感をもたらす役割も持っている。相手に好印象を与えるチャンスでもある。しかし、その構成や伝え方には分りやすくするための工夫が必要だ。相手の記憶に自分の情報を残す、そして相手と話したいという態度を示すには、インパクトのある自己紹介をせねばならない。かつ、テンションの高いままただらすると逆効果だから、コンパクトにまとめる必要がある。

インタラクティブ・フォーラムでは、本番の会話の前に自己紹介の時間が設けられる。その限られた機会を有効に使うために、最初の練習では、「インパクト&コンパクト」をもとに自己紹介取り扱った。自己紹介の構成をするとともに、人前で喋る態度の基礎を、相手の情報を聞く態度の基礎を身につけてもらうためだ。

インパクトの領域では、好印象を与える事・話題を作り出す事を主軸においた。特に、
ーニックネームー

相手が呼びやすく記憶に残るニックネームを考えさせ、また相手のニックネームを会話中に必ず使うよう指導した。お互いニックネームで呼ばれば安心感を得られるし、笑ってしまうほどのインパクトがあれば、「この人と話せば楽しそうだ」と思わせる事が出来る。練習では自分の名前をもじったものや全く関係のないもの(ex.「マシンガン」)が出た。

ートピックに関するひとことー

本番がスタートしてからは、自分の事をいきなり言い放つよりも質問から入った方が良い。せっか

く4分間の会話の前に自己紹介が別枠でとってあるのだから、トピックに沿った情報を一つくらい言うのが望ましい。情報をより具体的に「ツッコミどころ」として提供するように促した。その方が、スムーズに会話を流れさせる・深めることができる。

以上2つの事に重点を置いた。それらの文章を短くまとめ、全ての自己紹介文をあえて「5文以内」としてコンパクトなものに仕上げさせた。

最後にそれを全員の前で発表させた。声の大きさや相手の反応に注意を払いながら取り組んでもらったが、いささか不十分だった。同時進行で発表中の自己紹介から情報を聞き取るリスニング課題も課した。これらのアクティビティを通じて、少なくとも自己紹介のパターンを持ち、そこから深めるスキルを身につけてもらえたと思う。

5. イメージマップ整理法

「自分の事が言える」という到達目標では、自分の事を的確に言う事、つまり自分の事・感情を取り繕わずさらけ出す事を求めている。さらに話が行き詰まらないようスムーズに話題を進めるために、話のネタを流れてまとめることも必要とされる。

そこで私が主に英語スピーチなどのスクリプトづくりで使用した方法を実施してみた。それが「イメージマップ」だ。紙の中央にトピックを書き丸で囲む。ここから線を引っ張り、丸の中の単語(キーワード)から連想される事を書いては丸で囲み、どんどん線でつないでいく方法だ。この方法は、

そもそもこの練習をやる事にしたきっかけは、自身の反省にある。私の頃の練習は、とにかく英文を思いつく順にストックし、会話会話会話の毎日だったが、書いた事が整理されずに頭の中がごちゃごちゃになり、本番が終わったとに「あの時あれを言っていれば良かった」などと後悔したからである。練習前に短い会話をしてもらい、生徒達に感想を聞くと、「会話に深みがない」などの意見が出た。

イメージマップをつくることで、話の流れを考えながら英文をストックする事が出来る。また話の流れを図形的にイメージしておけばどこかで話の道筋が分からなくなっても違う路線をたどる事が出来る。仮に自分の予期しない話題になっても、キーワードを覚えておけばそこから道筋を再びたどる事が出来る。そしてこのトレーニングを重ねる事で、紙に書く必要がなくなってくる。そうするとキーワードから話題を連想して先読みするスキルと、会話を瞬時にキーワード化する要約力が身に付く。

イメージマップを描かせる際は特に、

- ・キーワードは英語で書く
- ・一つのキーワードから3つの枝を出す
- ・他人の話や単なる事実から自分の感想や意見、経験につなげる

ことを中心に指導し、なるべくスムーズな流れで色々な話題に触れるようにさせた。

一番長くつながった流れを即興で文章にしてもらい、最後に発表をしてもらった。一番長い生徒で10個以上のキーワードがつながるマップが出来ていた。

いずれにせよこのアクティビティを実施する事で、さらにこの先の到達目標を達成できるようになると考えている。とりわけ、話題の中心を事実や他人から「自分」へ持ってくる感覚を身につけていくには有効だと思っている。

6. あいづち2.0

身体を基盤とするコミュニケーションにおいて、特に聞き手側が取るべき基本原則を、斎藤孝氏は4つ挙げている。目を見る、微笑む、うなづく、そして最後があいづちを打つことである。あいづちについて氏は、会話の流れを良くする潤滑油だと述べているが、私はさらに別の役割が備わっていると考えられる。

それは、相手の話を理解するという事である。相手に対してその意思表示をするとともに、自分が話を理解したかどうかの確認作業をするチャンスがあいづちである。インタラクティブ・フォーラムでは、誰もが喋りたがる。そんなときにこそ相手の話を聞いてあげて、最後においしいところを持っていくのが上手な戦略である。

英語では特に、はっきりと・相手の話の切れ目を狙ってあいづちをうつ必要がある。あいづちで核になるのは、あいづち表現の多さとタイミングの良さである。

この回ではあいづちをテーマにしたが、単なる「へえ、ふうん」といったものではなにも面白みがなく、話を理解したという意思表示にはほど遠いと考え、ひと味違ったあいづちを練習してもらった。

～声のトーン～

声のトーンの上げ下げや語の言い方次第でニュアンスが変化する。たとえば同じ「Really」でも、語尾を上げれば質問調に、下げれば驚きを表し、低いトーンから語尾を上げれば疑い深い調子になる。

～相手の言った事をそっくりそのまま繰り返す～

話をちゃんと聞いている・理解していることを示す技法として相手の喋った内容をそのまま繰り返す技法がある。「そうなんだあ」という驚き・関心のニュアンスや確認の意味を持って発言すれば、聞いている事を相手に示しつつ、自分も相手の発話の内容を確認できる。

ー自分の感想を言うー

すごい、気の毒だ、楽しそう、おもしろそう、などの形容詞を用いて自分の感想を付け加える事で、よりいっそう理解している事を示せる。「That soundsー」「That'sー」の使い分けでニュアンスを変化させる事も可能だ。自分の感想を述べる事は、自分の事を的確に述べる上でも重要なスキルになってくる。

ーちょっとした質問をするー

完全な文章になっていなくていいから、せめて疑問詞をくっつけてみるという方法がある。会話の潤滑油として話を流れさせる役割を持つ。相手の提供した情報を無駄にせず、話を深める事ができる。特に求められるのは、具体的な答えを引き出す、いわゆる 5 W 1 H の疑問符であり、Yes/No で答える質問はさほど重要とは言えないだろう。

以上を、これまでとはちょっと違うあいづちの表現として認識させ、いくつかパターンを作ってもらい、それを用いて会話をしてもらった。表現を学ぶ前と後とでは、会話のテンションや流れがまるで異なり、生徒達はよりいきいきと会話にコミットしていた。

7. プラスα・インタラクティブ

話の流れが途切れたり、気まづくなったりする最大の理由は、情報の発信が足りないからだ。単なる事実や他者・自分以外の事について話すだけでは、どうしたって話題の限界はやってくる。また方向性を導く「質問」がうまく生まれずには情報発信はなされない。会話を相互的にするには、質問と返答との双方が必要であり、繰り返しによって話は深まる。そして質問をするスキルは、相手の情報を要点化する役目と話の流れを自分の意図する方向へ持っていく役目を持っている。

「プラスα」をテーマとした練習では、ある情報に「もう一言」加える、そして質問の中で「もう一言」を引き出す、という2つの事に取り組んでみた。

自分からプラスαをだす上で気をつけたいのが、そのプラスαの情報は全て自分に関係する事にする、という点だ。つまり、自分の感想や意見、経験を加えるという事だ。たとえば他人の趣味に対して自分の趣味について触れるなど、自分自身に関連させた情報を付け加える。相手から質問が来ても、答えだけではなくプラスαを付ける。これがツッコミどころとなり、さらに話は広がっていく。

一方質問する側は、相手のプラスαを、つまり相手のツッコミどころを引き出すような質問をする必要がある。相手にもっと話してもらうためのガソリンとでも言えるだろう。一番のツールは5 W 1 H の疑問符を用いた質問文である。相手の情報について尋ねたり、相手の話を深めたりする役割を担ってくれる。もちろんYes/Noの質問も使えないわけではないが、それは単に事実の確認に使うだけで、その先に質問や話をつなげる必要がある。

このトレーニングをした後に会話をを行うと、それ以前よりもスムーズに質問が飛び交うようになった。さらにこのトレーニングは、アイコンタクトを取る訓練も兼ねておりあり、このトレーニングをする前と後では、目線が泳いだり合わせなかつたりすることも減った。

8. 終わりの美学

終わりよければ全て良し、という言葉の通り、会話コミュニケーションにおいても、終わりを意識するのとししないのでは大きな差が出る。会話の終わり方が印象のいいものであれば、互いの心はすっきりするが、その逆では後味の悪い別れ方になる。

初対面のコミュニケーションはその場限りのものではない。むしろそれがスタートとなって、これから先の関係性を築いていくのだ。初対面の段階での会話は、この先ずっと続いていく関係生の、ほんのスタートの部分にしか過ぎないのである。

そのために私は後輩達に、1. 相手と礼をしよう→2. 相手と握手して「楽しい話をありがとう」→3. 別れ際に「また今度いろいろ聞かせてよ」→4. 最後は「じゃあね!」、という例を出し、実践してもらった。後輩達は見事に終わりへの意識を持ってはいなかったが、特に楽しい話だった事を感謝する、また一緒に話したいという姿勢を見せる事について重点的に指導をした。

上記2点を押さえる事で、話の相手は嬉しくなり、「もう一度この人と話したい」という印象を持つようになる。むしろ、そういった印象を持ってもらうためにこそ、終わりを意識して具体的にコトバにしてみる事が必要なのである。

9. 「正直」と「配慮」の絡み合い

山田ズーニー氏は、「コミュニケーションは戦略である」と言っている。氏は特に「正直という戦略」を主張視できている。自分の意見・感情を押し殺さず、自分の素を正直に伝える姿勢をお互いが持つこと。それは相手を受け入れる誠実さにもつながる。初対面を不安がる前に、自分のありのままを伝える「攻め」の姿勢。

しかし、相手に対して誠実さを持つという事は、相手の正直さを受け入れる事であり、自分の正直さを相手の目線で伝えるという事でもある。相手の言いたい事を汲み取り、それを発展させていく。分かりやすく伝え、質問をしやすい環境を作る。正直な姿は相手の中に映るものだ。だから、相手に対して常に「配慮」をせねばならない。単に「攻め」入るだけでは一方的すぎる。

「お互いが」楽しんでこそ、印象は良くなる。「お互いが」響き合っこそ感情を共有できる。「お互いが」インタラクティブになる(=相互に作用する)ことでこそコミュニケーションは成り立つ。私は後輩達の指導に当たっては、「お互いが」を意識した。情報の伝達が一方的では、とてもインタラクティブとは言えない。互いの「正直」と「配慮」とが組み合わさり繰り返される事で、感情の共有が深まっていく。

練習の段階では、友人どうしで喋っている後輩達も、もうすぐ本番を向かえ、これまで取り組んできたトレーニングの成果を試すときがやってくる。練習を重ねるごとに、「お互いが」絡み合っこそ、深く楽しい会話になるという事に気がついた。後輩達には、楽しい会話をしてもらいたい。悔いを残さず、人とつながる喜びを感じてもらいたい。そして、コンテストが終わってからも、「コミュニケーションが好き」であってほしい。

<参考文献・書籍>

- ・「コミュニケーション力」 斎藤孝 著 岩波新書 2004年
- ・「なぜあの人とは話が通じないのか? 非・論理コミュニケーション」
中西雅之 著 光文社新書 2005年
- ・「伝わる! 揺さぶる! 文章を書く」 山田ズーニー 著 PHP新書 2001年

<参考文献・Web>

- ・「英語であいづちを打つためのコツは?」 All About
<<http://allabout.co.jp/study/travelenglish/closeup/CU20070226A/>>
- ・「英会話上手にみせる裏技練習法ここにあり! 英語練習! 相手の言葉を繰り返す」 All About
<<http://allabout.co.jp/study/english/closeup/CU20040802A/>>
- ・「vol. 53 上手なあいづち」 かかってこい! 英会話
<http://w117.d.fiw-web.net/you_know_this/vol.53.htm>